

学び合う生徒と教師～自走する生徒の育成を目指して～

ホンモノ体験×認知科学

～令和7年度のあゆみ～

附属天王寺中学校・高等学校研究部

1. 前年度までの課題と今年度の目標

前年度の課題の中で今年度に解決が求められるものについて大きく2点である。

- ① 地域への貢献
- ② 大学との連携強化

この2点を踏まえて、研究部では以下の達成目標を年度当初に全教員と課題の共有を行った。

【本年度の達成目標】

1) 教科

「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」
「学びに向かう力、人間性等/主体性」

* 中高での関連性が明示された授業実践

→ 中高教科会を実施し、目標設定を行う

2) 地域連携

推進日に大阪府下の教員と共に学び合う研修を立案。**強化**

→ 校内研修に大阪府下の中高に呼びかけを行いともに研修の機会を設ける（推進③）

3) 大教大との連携

教育研究会指導助言講師及び講演講師について、教育研究会テーマ、教科テーマに従い大学へ依頼→（推進⑤ 教育研究会）**新規**

4) 教育研究会

① 1) に基づいた授業実践を行い、中・高での発達段階における指導のあり方を明確に提示

② テーマに関する発表を今年度のローテーションに従い中・高で発表

③ 事前に決められたローテーション以外の教科も希望教科は発表可

④ 自由研究などの指導に関する研究発表も継続して実施

⑤ 当日の授業発表以外に、教員によるポスター発表 **新規**

→（推進⑤ 教育研究会）

5) 集録

研究部として上記の目標を中心とした研究成果

と教育研究会実施報告を集録にまとめる。

原稿は原稿要領に従い、A4サイズ、2段組とする。教育研究会実施報告は中高の実施報告書とする。

6) 近附連・全附連関係

全附連 会場校：神戸大学附属高等学校 10/10(金)
生指、あり方、保体、理科、家庭

近附連 京都教育大学附属京都小中学校 8/1(金)
(義務教育学校、高校、特別支援)
社会、人権

2. 今年度の研究

第72回（令和7年度）学び合う生徒と教師

～自走する生徒の育成を目指して～

ホンモノ体験×認知科学

2-1. 研究テーマの背景

令和4年度から6年度の3年間は「コンピテンシーを軸に」という大きなテーマの柱を置き実施してきた。今年は、その3年間を振り返り、本校の課題や現在各教員・教科が行ってきている文言を推進日にアンケートを取り、全教員が共通して意識している文言をテーマに盛り込んだ。そのため、テーマには複数の要素が包含されており、横断的研究が求められるものとなったが、3年間で行ってきた内容と教科横断授業の経験を認知科学という新たな分野に落とし込み、教員も学びながら研究を進めていくことを決定した。「学び合う生徒と教師」には、生徒同士が学び合い、また授業の中で、生徒と教師が学びを深めることを目指すものである。「自走する」生徒を育成することは従来からの目標であり、教員が全て教えることよりも自らが課題を見つけて深く学ぶ過程の中で楽しみを見つけてほしいという願いも含まれている。また、副題として「ホンモノ体験」は創立当初より複数教科で学校文化として定着していたものを敢えてキーワード化し、どの教科でも

「ホンモノ体験」を生徒が体感できるような仕掛けを作ることにした。そのような中で教師自身が「認知科学」という新たな分野を学びながら日々の授業を学問的にとらえ、分析できる能力の獲得を目指した。先述したように、大変欲張りなテーマであるが、数年間かけてこのテーマで研究を進めていきたい。教師自身が授業立案が楽しく、周りの教員と協同しながら働ける環境を研究という中心軸を置きながら過ごすことを目標とした。

2-2. 教育研究会実施

日程：11/8（土）

公開授業：国語（中高）、社会（中）地歴・公民（高）、数学（中高）、理科（中高）、音楽（中高）、美術（中）、技術・家庭科（中）、英語（中高）、道徳（中）、自由研究（中）

講演講師：神 孝幸 先生

（文部科学省 国立教育政策研究所 教育課程研究センター 研究開発部 学力調査官（併任）教育課程調査官）

講演テーマ：「非認知能力の視点をデザインした授業改善～探究を通じた深い学びへの試行錯誤～」

2-3. 新たな試み

1. 教育研究会の案内チラシを例年2回郵送していたが、1回に減らした。その1回目のチラシの送付を夏休み終わりごろに各学校に到着するように設定し、2回目の案内はICTを活用した。2回目の案内に関してはICTということもあり、担当者が9月末を締切とし、その後そのファイルを凍結し、校外の方にそのリンクを送り、閲覧できるように設定した。
2. 教員のポスター発表の実施
例年の発表ローテーションもあり、うまく自分の研究が発表できない年がある。そのため、生徒たちに自由研究や課題研究で指導しているポスター発表を教員が作成し実施した。
3. 大阪教育大学教員による指導助言
当日の指導をいただいた。教科によっては通常からご指導をいただいている教科もあるが、今後は年間を通じて大学教員が中高現場で指導いただけるかを模索していく。

2-4. 研究推進日

- ・学期に一度の小中高研究部会を持つ
→小中高研究主任で打ち合わせ

- ・推進日は年間行事予定に掲載し、年間の予定として教員の研修時間を計画的に確保する（表1）
- ・研修（ワークショップ）に関して本校の教員に必要な研修や課題解決のための研修を研究部が検討し実施する
- ・中学校自由研究の取り組みと高等学校課題研究の取り組みにおける繋がりを構築するための情報共有を行う

表1 推進日の日程と内容

推進日	日付	内容
推①	4/25 (金)	年度方針の発表 中高教員交流会
推②	6/05 (木)	小中高研究部会① 高校主担 指導者：今澤宏太 「教育データの分析について」
推③	7/18 (金)	講演 今井むつみ 「学力喪失」 *附属天王寺小学校 / 大阪府市町村
推④	9/24 (水)	教育研究会中間発表
推⑤	11/08 (土)	教育研究会
推⑥	12/09 (火)	小中高研究部会② 中学主担 「ホンモノ体験実践」
推⑦	2/25 (水)	小中高研究部会③ 小学校主担
推⑧	3/19 (木)	年度総括と次年度に向けて

推進日の日程の決定は前年度の行事予定決定時に行う。学期に1度の小中高研究部会日程については研究部長3名で相談し決定し、内容に関しては主担校種の研究部長がその年の研究主題に合わせて決定し連絡を行う。縦の繋がり、横の繋がりを意識したものである。

特に今年度は、大学との繋がり、また研究の分析手法、それぞれの研究を有意義にするための研修の立案を行った。それにより、研究主題の一部である「学び合う生徒と教師」の教師の学ぶ姿勢を生徒にも見せながら学んだことを生徒に還元できる仕組みの確立を目指したものである。

推進日①

実施日：4月25日（金） 場所：小講堂

実施内容：

1. 今年度研究主題
2. 教育研究会
3. 交流会

前年度までの研究主題の流れを確認し、研究部が立案した今後3年間を見通した研究主題（案）を説明した。

1. その中で前年度に実施した「R6年度気づき（1枚ポートフォリオより）」（表2）の振り返りを行った。これは、令和6年度実施した推進日での学びを一枚のポートフォリオに教員の学びを記入して年間を振り返るものである。
2. 今年度教育研究会の教科割り振りの確認と今年度発表教科ではないが、発表希望の教科の締め切り日の確認を行った。新規事業に関しては、全員に明確に伝わるように説明を丁寧に行った。
3. 交流会

中高教員が合同チームを作り以下のテーマに沿って交流会を行った。

1. 自己紹介
2. 教科独特の一番大事にしていることは？
3. あなたにとって「ホンモノ体験」とは？
4. 附属天王寺で「自走する生徒」ってどんな生徒？

上記4点であったがグループごとに盛り上がりより良い交流会となった。このグループでの繋がりが日常の教科の枠を超えた交流に繋がることを研究部は目指して運営を進めていく。特に、各教科で「ホンモノ体験」を行っている教科は多く、今後の推進で各教科が行っている教材を教員が体験することへのアイデアに繋がった。

また、認知科学の学びを今年度よりスタートするために「自走させる工夫・取り組み」について日々の授業の試行錯誤している事柄を共有した。

この交流会を通して、校種を超え、教科を超えた人と人の繋がりで1年間をスタートできた。中高ともに対話・議論を大切にしている学校である。生徒にそれを伝えていけるとともに、教師も働き方改革の一つとして会議を減らすことが挙げられるが、対話で行うことの意義の深さを体験する場面となった。

表2 令和6年度 振り返り

R6年度気づき（1枚ポートフォリオより）

- ・今年度の最大の収穫は今井むつみ「学力喪失」（岩波書店）からの学びでした。
- ・年度当初と年度末では附属天王寺型 STEAM の授業をすることが目的ではなく、附属天王寺型 STEAM の授業で生徒に対してどんな力をつけるのか？といった生徒に力をつけるために手段でしかないということに気づいた。手段の目的化については私自身が1番気づけていたはずはあるが、授業や教育研究会の発表でそれをしてしまったことは反省である。しかし、教科を代表して授業案を考えていく中で自分自身の授業の課題や研究テーマの再構築することができた。教員生活でのターニングポイントであった。
- ・推進時に可能な限り府立教員と連携を深めたい。研修にぜひ読んでほしい先生：原 清浩（佛教大）
- ・推進日に校外の人を招くアイデアはとても面白いと思った。
- ・ポートフォリオがあるといつ何をしたかを振り返れるので良いと思った。校外の方々との交流があると良いと思いました。交流できるとそれだけ学びがあります。
- ・教科間の情報交換はとても有意義だと思うが教科横断や STEAM はその実施目的がますますわからなくなってきた。
- ・本物を通して学ぶことや本質を学ぶこと、学習の三層構造や斜めの関係での学びなど多くの理論や重要な観点を学び、自身の授業のあり方に言語化された方向性を見出すことができた。
- ・指導助言者以外の様々な学識経験者から今年度の研究課題について指導を受けられた。
- ・STEAM については失敗から学ぶことができた。
- ・附属天王寺型 STEAM を実践する上で教師集団がまずは自律的に学び続ける姿勢を持っており、その姿を生徒に見せることが大事。そのような環境の中で教師と生徒、生徒と生徒が相互に対話を通じて学びを深めていくことができるのではないかと。
- ・STEAM は教科横断という考えでは成立しない。カリキュラムマネジメントの範囲で考えると教科横断という発想となってしまう。課題解決 PBL を参考にし、その事例を研修で共有することから始めてはどうか。
- ・学校として強い方向づけはなかったでそれぞれの感覚で STEAM を捉え実践していた。
- ・附属天王寺で教育研究に触れて少しづつ理解が深まってきた。
- ・生徒が学ぶことを楽しむためには授業者も楽しみながら学ばなければいけない。さらに授業者はより良い発展のために仮説検証していく姿勢は持ち続けたいといかない。
- ・研究会での発表を通して生徒の学びのメカニズムを指導助言者に解説いただき自分の考えていることが言語化された気持ちになった。
- ・校種や教科の枠を超えても共通することがあるため、グループでの議論はとても大切だと感じた。
- ・授業実践のレベルにどのように高めていくかという問いを一年間考え続けていた。
- ・あまり難しく考えず自分の興味関心から出発し、STEAM を実践できたらと思う。
- ・附属天王寺型って言われてしっかり自分でイメージを描けたのか？
- ・連携するあたり生徒の興味関心に合わせて、研究できたらと思いました。
- ・STEAM について隔年1年になった。比較的自由に横断的な活動を時間にとらわれずに行うことができた。教科の特性について断続的な授業について学ぶことでより明確になり大切にしようと考えようになった。

推進日②

実施日：6月5日（金） 場所：小講堂

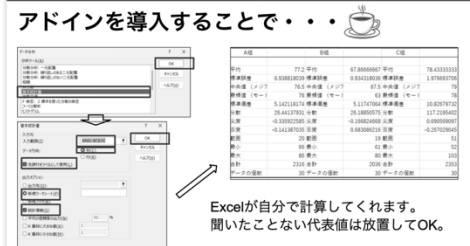
実施内容：

講師：今澤宏太（本校中学校教諭）

内容：教育データの分析

目的：3つの分析方法（本統計量、対応のあるt検定、カイ2乗検定）について学ぶ。3つの教育データの分析が必要なケースの実践を交えながら、データ分析について学び、今後の研究のヒントとする。

アドインを導入することで・・・



Excelが自分で計算してくれます。
聞いたことない代表値は放置してOK。

今回の研修をふりかえって・・・

	① 理科・鈴木先生	② 英語科・田中先生	③ 国語科・中村先生
課題意識	3年生の3クラス間で理解度の違いや、各クラス内のばらつきに注目したい。	英単語学習アプリを使えばより効率的に定着できるかについて数値的に検証をしたい。	満足度の差について数値的に検証をしたい。
データの概要	単語テストを行い、その点数データを(0~100点)を入力した。	1週目は従来の単語学習、2週目は学習アプリでの単語学習を行った。1週目、2週目に同じ単語テスト(20問)を実施し、点数データ(0~20点)を入力した。	A・B組それぞれの生徒に、「あなたは、国語の授業についてどのように感じていますか？」という質問をし、4件法で回答を求め、回答データを入力した。
分析の方法	基本統計量	対応のあるt検定	カイ2乗検定

推進日③

実施日：7月18日（金） 場所：みらい教育共創館

講演者：今井 むつみ氏

略歴：

一般社団法人今井むつみ教育研究所所長
慶應義塾大学名誉教授
文部科学省中央教育審議会専門委員（2025年1月）
日本認知科学会フェロー

専門分野：

認知科学、特に認知言語発達科学、言語心理学

著書：

『学力喪失—認知科学による回復への道筋』
『算数文章題ができない子どもたち ことば・思考の力と学力不振』（共著）
『言語の本質』（共著）
『ことばと思考』
『学びとは何か—〈探究人〉になるために』
『親子で育てることば力と思考力』
『「何回説明しても伝わらない」はなぜ起こるのか？認知科学が教えるコミュニケーションの本質と解決策』
『英語独習法』 ほか多数

○ 講演の導入：講演の前提

学びは「教え込み」ではなく「自走」

今井先生は、人間が本来「自ら学んでいく力」を備えているという見方を出発点に、教育者ができるのは知識を一方向的に“移す”ことではなく、学びが起る条件を整えて「助けること」だと述べた。学びとは、外から情報を注ぎ込む作業ではなく、学び手が自分の経験や既有知識を使って理解を組み立て直す営みである。したがって、教師の役割は説明の量を増やすことなく、学び手が自分で考え、試し、修正できるような環境や課題を設計することにある。

1. 「スキーマ」による情報の解釈

理解は“受け取り”ではなく“再構成”

人間は、日々の経験をそのまま蓄積するのではなく、ばらばらの出来事を抽象化し、共通点を見出してつなぎ合わせることで、暗黙の知識の枠組みである「スキーマ」を形成していく。私たちは外部の情報をそのまま脳に取り込むことはできない。既に自分が持っているスキーマに照らし合わせて、重要だと思う情報を選び取り、足りない部分（行間）を補いながら、ようやく意味のあるものとして解釈している。このため、説明が丁寧で

あるかどうかよりも、「聞き手のスキーマと合っているか」が理解の成否を左右する。スキーマが相手とずれていると、言葉は聞こえていても内容は素通りし、理解に至りにくい。これは学習場面に限らず、日常のコミュニケーションや外国語学習で「言っていることは分かるはずなのに腑に落ちない」と感じる根本要因にもなる。

教育の場面では、説明の前に既有知識を呼び起こしたり、具体的な例・体験を共有してスキーマを揃えたりすることが重要になる。つまり、理解を生む鍵は「情報の追加」ではなく、「解釈の枠組み（スキーマ）の調整」にある。

【具体例（授業・日常）】

例：同じ“割合”の説明でも、買い物・値引きの経験がある生徒は理解が速いが、経験が乏しい生徒は言葉だけでは定着しにくい、など。

【典型的な誤解】

「説明が足りないから分からない」と考えて説明を増やしても、スキーマが合っていない場合は改善しにくい、など。

【支援の手立て（足場）】

- ・最初に身近な状況を提示する
- ・既知→未知の順で例を並べる
- ・“同じ/違う”を言語化させる、など。

2. 人間特有の思考スタイル「アブダクション推論」

仮説で世界をつなぐ

今井先生は、人間が演繹（えんえき）的な論理推論は得意ではない一方で、「アブダクション推論」という強力な思考の形式を持つことを指摘した。アブダクションとは、限られた観察事実から「こういう仕組みがあるのではないかと仮説を立て、目に見えないメカニズムを推測する推論である。

この推論の特徴は、少ない事例から意味のある説明を組み立てたり、一見無関係な知識同士を結びつけたりできる点にある。演繹は、前提が正しければ結論が必ず導かれるが、前提以上の新しい知識は生み出しにくい。対してアブダクションは、仮説という“跳躍”を含むため、知識の拡張や概念の創造につながりやすい。人間が新しい発想を得たり、未知の現象を理解したりできる背景には、このアブダクションの働きがある。

学びの現場でも、答えや公式を先に与えるより、「なぜそうなるのだろう」「どう説明できるだろう」と仮説を立てさせることで、思考が起動する。仮説は間違ってもよく、検証と修正を通

して理解が深まること自体が学びの中心になる。

【具体例（授業・探究）】

例：実験結果の少数データから「原因は何か」を考え、説明モデルを作る、など。

【典型的な誤解】

「当てること」が目的になり、外れた仮説を失敗と捉えて思考が止まる、など。

【支援の手立て（足場）】

- ・仮説を複数立てさせる
- ・「根拠は何？」をセットで問う
- ・検証方法を一緒に設計する、など。

3. 「記号接地（シンボル・グラウンディング）」と本物体験

記号は経験につながって初めて生きる

知識が「生きている」状態になるためには、言葉や数式などの記号が、身体的・感覚的な経験と結びつく「記号接地（シンボル・グラウンディング）」が不可欠である。記号は、記号同士の関係として操作できてしまうが、それだけでは“意味”が伴わない。意味は、経験や行為に支えられて初めて立ち上がる。

この点で、生成AIは記号から記号へと連鎖を生成しているだけで、実感を伴う意味を持たない、と今井先生は述べる。人間でも、意味を理解せず手続きだけを覚えてしまうと、状況に応じて記号を運用できず、もっともらしい誤り（ハルシネーションのような誤答）を起こすことがある。つまり問題はAIだけでなく、人間の学習も「記号が経験に接地しているかどうか」によって質が大きく変わる。

だからこそ、文字通り「身体を地面につけて経験する」ことが重要になる。操作、実験、観察、作図、計測、制作など、身体を介した活動は、記号を意味あるものにする土台となり、理解を安定させる。

【具体例（数学・外国語）】

例：面積公式を暗記するだけでなく、実際に切り貼りして面積が保存される経験を持つと、応用問題で崩れにくい、など。

【典型的な誤解】

「解ける＝理解している」と見なし、手続きが回る状態を理解と誤認する、など。

【支援の手立て（足場）】

- ・具体物→図→式の順で往復させる
- ・言葉で説明させる（経験に接地させる）
- ・“なぜその操作をするのか”を問い返す、など。

4. 「自走できる学び手」を育てる支援

ブートストラッピング・サイクルと足場かけ

学びとは、学び手が自分で推論し、パターンを見出し、誤りを修正しながら、知識体系を更新していく過程である。今井先生はこれを「ブートストラッピング・サイクル」として捉え、学びは常に試行錯誤と自己更新の循環によって進むと述べた。

この見方に立てば、知識を直接「移植」することは不可能である。教育者ができるのは、学び手が自力で登っていけるように、必要なときにだけ支えとなる「足場（スキヤフールディング）」を組むことだ。足場は、答えを与えるのではなく、考えるための手がかりや、取り組みやすい順序、見通しを提供することである。また、わかりやすく教えすぎると、探究の余地が消え、学びが受動的になる。あえて「わからない」状態を経験させ、もがきながら自分で発見した知識のほうが定着しやすい。重要なのは、放任ではなく「適切な難しさ」を設計し、必要なタイミングで最小限の支援を差し出すことである。

【具体例（授業設計）】

例：最初はヒントカードを多めに用意し、途中から減らして自力で説明させる、など。

【典型的な誤解】

“わからない”を放置して不安だけが増え、学びの循環が止まる、など。

【支援の手立て（足場）】

- ・小さな成功体験の階段を作る
- ・誤りを共有し、修正の方法を扱う
- ・問いの焦点を絞る（「何を比べる？」など）など。

○ 結論

学びは「学び方を学ぶ」ことであり、思考の筋肉を育てること

真の学びとは、情報の量を増やすことではなく、理解の枠組みを更新し続ける力を育てることである。スキーマを整え、アブダクションで仮説を立て、経験に接地した意味を作り、誤りを修正しながら循環を回す。この過程そのものが「学び方を学ぶ」ことであり、思考の筋肉を鍛える営みである。

生成AIのような便利な道具は、探索や整理の補助にはなるが、答えを受け取るだけでは思考の筋肉は育ちにくい。学び手が自分の力で登っていくプロセスを支えることが、教育の核心になる。

＝理解を深める比喻：学びを「登山」にたとえる＝

今井先生の講演に基づけば、学びは登山にたとえられる。教師が子どもを背負って山頂に運ぶ（知識を移植する）ことはできない。教師ができるのは、子どもが自分の足で登れるように、岩場に梯子をかけたり、足場を組んだりすること（足場かけ）だけである。子どもは自分の筋肉を使い、ときに道に迷いながら、仮説と修正を繰り返して登る。そのプロセスを経て初めて、山頂の景色（生きた知識）に到達できる。

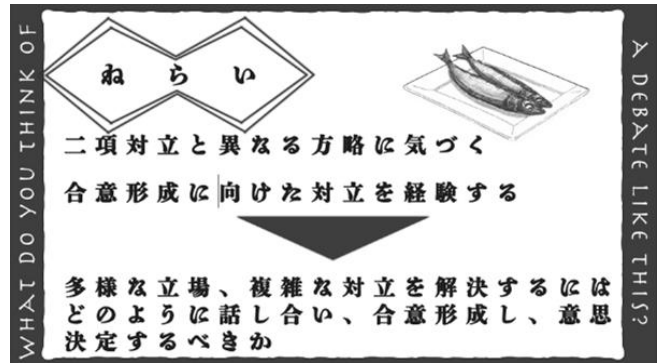
推進日④

実施日：9月24日（水） 場所：小講堂

*発表10分+質疑応答5分

*数学・美術・技術・道徳・自由研究に関しては
発表5分+質疑応答5分

発表+質疑応答	教科
14:05-14:20	国語
14:20-14:35	社会
14:35-14:45	数学
14:45-15:00	理科
15:00-15:15	音楽
15:15-15:25	美術
15:25-15:35	技術・家庭科
15:35-15:50	英語
15:50-16:00	道徳
16:00-16:10	自由研究



● まとめ

- ・文学に触れずに高校を卒業する社会になりつつある。
- ・国語科教員の想い(学習指導要領も)と生徒の間に乖離が存在しているのでは。
- ・同テーマの評論・小説を読むことで、この乖離を解消していけることができるのではないか。

教科テーマ 公民的資質・能力の育成

↓ 学習指導要領では…

・公民的資質・能力

平和で民主的な国家及び社会の有為な形成者に必要な資質・能力

→社会についての広く深い理解力と健全な批判力が必要

↓ 教育研究会では…

中学 経済リテラシーの育成

高校 根拠に基づく判断力の育成

問いを問題に変える力の育成のステップ

- ① 直感的な問いの提示
→「立方体に正方形の模様を投影したらどう映る？」などの問いかけ
- ② 観察や実験による具体化
→実際に投影したり、紙の立体模型に絵を描く活動
- ③ 数学的表現への橋渡し
→「これは座標変換で説明できるのでは？」
「相似や合同の関係を使えるのでは？」
- ④ 定式化・一般化
→問いを数式や図で表すことで「解ける問題」へ転換

サイエンスリーダー (1年時から継続)

理科の授業でも
生徒中心に！

リーダーがいれば
主体的になり
やすいかも！

主体的な
学習の活性化



理科の授業をリードする
サイエンス・リーダーの育成！

前年度)R6 第71回教育研究会 音楽科 授業テーマ
**鑑賞教材を効果的に活用した
歌唱表現の創意工夫**

領域分野を横断した
(今回はA表現(歌唱)とB鑑賞)
授業実践

指導内容
A表現
↑
歌唱
器楽
創作
B鑑賞

【仮説】
鑑賞教材を表現の参考資料として提示
→知覚・感受が結果としておこる
(≠知覚感受が目的である)

本題材に至る背景

- ・日常に溢れる映像作品(実写やアニメ)やSNS動画コンテンツ
- ・映像メディア表現について、現行の学習指導要領美術編では「2 内容の取り扱いと指導上の配慮事項」に記載
イ 美術の表現の可能性を広げるために、写真・ビデオ・コンピューター等の映像メディアの積極的な活用を図るようにすること。
- ・高等学校の学習指導要領美術編では、「(1)絵画・彫刻」「(2)デザイン」、そして「(3)映像メディア表現」が記載
一 現行の小中高の学習指導要領は、GIGA端末導入以前。生徒の日常に溢れる映像メディアの観賞、制作機会は10年前の比ではない。一次期学習指導要領を待たず、映像メディア表現のカリキュラム研究は、今日的課題として必要であろう。

第7次「収穫と調理実習」

家庭での生物育成における主な課題
限られた住環境の中で、「手軽にクリーンに生物を育てたい」と感じている...

環境の問題 害虫の問題 世話・管理の問題

最も多く挙げられた課題。「日が当たらない」「ベランダが狭い」など、特にマンションのような都市部の住環境に起因する物理的な制約が大きな問題点である。

「虫が湧く」「家族に嫌がられる」といった回答が多く、衛生面への懸念や虫に対する嫌悪感が、育成をためらわせる大きな心理的問題点となっている。

「水やりを忘れる」「旅行中に世話ができない」「手間がかかる」など、多忙な生活の中で継続的に世話をすることの難しさが問題点となっている。

英語授業における多様な学び - 自由進度学習を手段として - 第72回 教育研究会 中間発表 小講堂

子どもが自ら学び出す
自由進度学習の
はじめかた

自己調整
につながる
学習理論を
ビジュアル

個別最適な
学びと
協働的な
学び

中学校数学
自由進度学習
生徒の自律と自立を促す

教員に35人の生徒がいれば、35通りの学びの場がある

CLIL : Content and Language Integrated Learning

Content
題材・内容

Communication
言語知識
言語技能

Cognition
協働学習
国際意識

Community/Culture
低次思考
高次思考

4Ts
・Text(内容・言語の素材)
・Talk(対話的学習)
・Team work (グループ活動)
・Task(思考の活用)

図1 CLILの「4つのC」
出典：和泉伸一 編著「CLILで広がる英語授業」

D20「自然愛護」の価値の捉え

- ① 自然を大切にするという行為を細分化して考える。
→「保護」「保存」「保全」という3つの視点
- ② 「生命の尊重」と「自然愛護」が対立する場面がある。
- ③ 世代間倫理の観点から、持続可能な社会を考える。

出典：高宮・椋木・鈴木(2025)

1. 学習指導要領から見える課題点

総合的な**学習**の時間の目標

探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を育成することを目指す。

探究的な学習における生徒の学習の姿

文部科学省、「中学校学習指導要領(平成29年告示) 解説 総合的な学習の時間編, 2017

各教科の発表に対して、それぞれが疑問を問いか
け、発表内容について理解を深めた。

推進日⑤

実施日：11月8日(土)教育研究会

研究主題：

「学び合う生徒と教師～自走する生徒の育成を
目指して～ホンモノ体験×認知科学」

内容	時間	場所
受付	9:00～9:30	校門前 吹き抜け
全体会	9:30～9:50 (20分) 校長・校舎主任挨拶、 本日の案内	小講堂
移動	授業Ⅰの教室へ	
授業Ⅰ	10:00～10:50 (50分)	各教科 指定場所
休憩	(20分)	
授業Ⅱ	11:10～12:00 (50分)	各教科 指定場所
昼食	12:00～13:00 (60分)	* 大学食堂・ 各教科控室 利用可
発表協議	13:00～14:30 (90分)	各教科 指定場所
全体講演	14:50～16:30 (100分) 講師紹介+講演	小講堂

大阪教育大学附属天王寺中学校
大阪教育大学附属高等学校天王寺校舎

第72回 教育研究会

2025
11/8 土

受付開始 9:00

9:30~16:30

対面実施・参加無料

「学び合う生徒と教師～自走する生徒の育成を目指して～」
ホシモノ体験 × 認知科学

講演



文部科学省 国立教育政策研究所 教育課程研究センター 研究開発部
学力調査官（併任）教育課程調査官

神 孝幸 氏

「非認知能力の視点をデザインした授業の改善
～探究を通じた深い学びへの試行錯誤～」

青森県出身。青森県総合学校教育センター指導主事、青森県立青森南高等学校教諭を経て、2021年4月より現職にいたる。2018年改訂の高等学校理科の学習指導要領作成、『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料【高等学校理科】作成にかかわる。教諭時代、探究的な授業改善と評価について、日本理科教育学会等で発表を行う。化学同人発行の『資質・能力を育む高校化学』にも著作者としてかかわる。

参加申し込み



申し込みはこちら

本校ホームページ及びQRコードから申し込み受付を開始します。

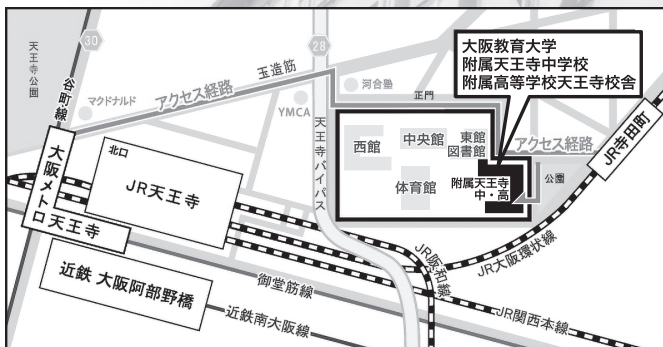
申し込み期間 10月1日(水)～10月28日(火)

※申し込み数超過となりました場合には、現職教員の方を優先させていただきます。

※申し込み完了時点では、ご参加いただけるか確定しておりません。

ご参加いただけることになりました方には、後日その旨をメールにてお知らせいたします。

アクセス



●JR大阪環状線天王寺駅下車 北出口より東へ約1.0km

●JR大阪環状線寺田町駅下車 南出口より西へ約50m

お問い合わせ先

大阪教育大学附属天王寺中学校
大阪教育大学附属高等学校天王寺校舎
研究主任：乾 まどか

〒543-0054

大阪市天王寺区南河堀町4-88

TEL 06-6775-6047

E-mail : kenkyu@tenko-g.oku.ed.jp

後援：大阪府教育委員会・大阪市教育委員会(予定)・堺市教育委員会(予定)

大阪教育大学附属天王寺中学校
大阪教育大学附属高等学校天王寺校舎

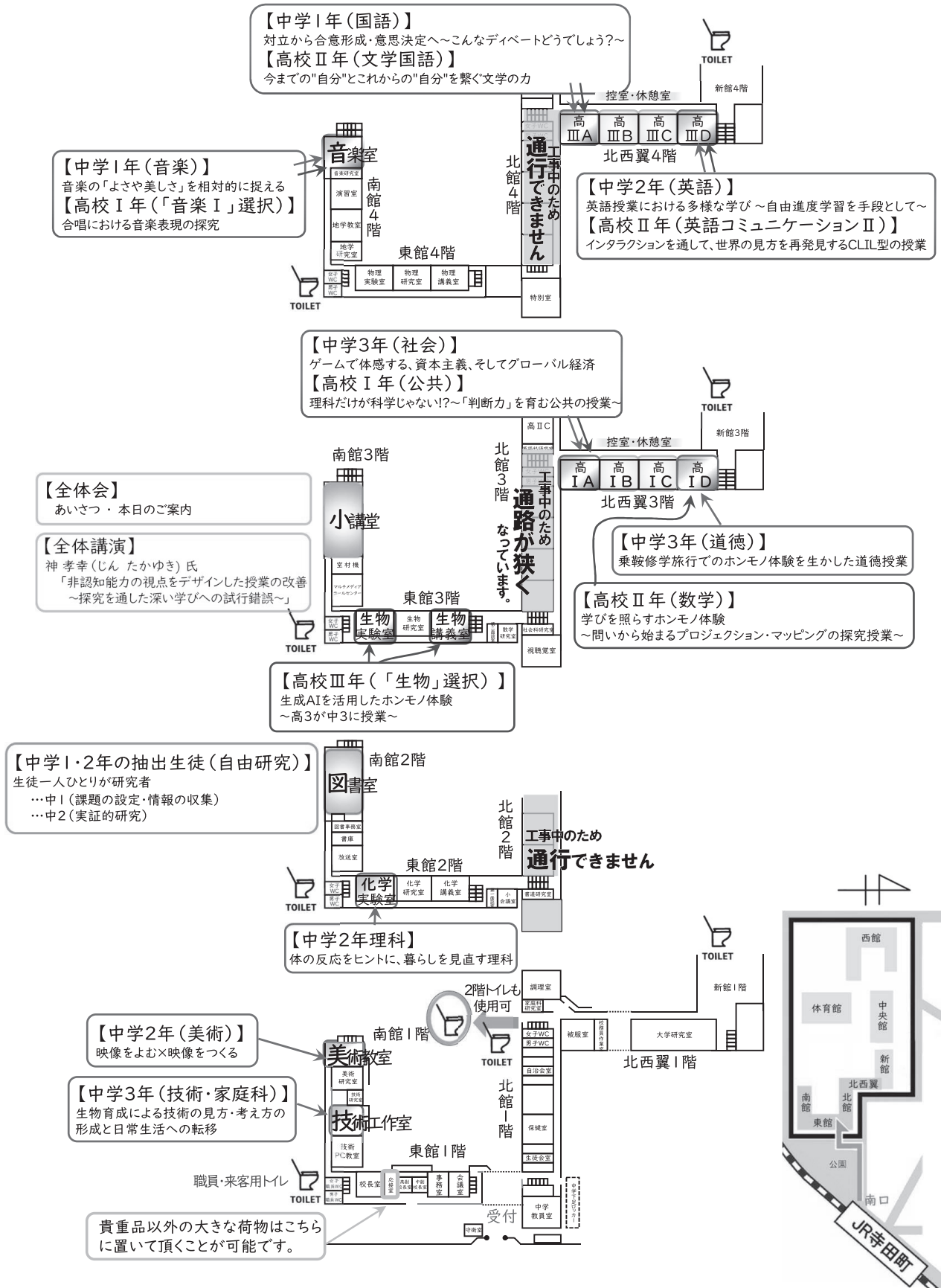


第72回 教育研究会
「学び合う生徒と教師～自走する生徒の育成を目指して～」
ホンモノ体験×認知科学

神 孝幸 (じん たかゆき) 氏
文部科学省 国立教育政策研究所 教育課程研究センター 研究開発部
学力調査官 (併任)教育課程調査官
「非認知能力の視点をデザインした授業の改善
～探究を通じた深い学びへの試行錯誤～」

Schedule

9:30～ 9:50	10:00～10:50	11:10～12:00		13:00～14:30	14:50～16:30
全体会 <small>(小講堂)</small>	授業Ⅰ(中学)	授業Ⅱ(高校)	休憩	研究協議	全体講演 <small>(小講堂)</small>
国語 高ⅢA教室 (北西翼4階)	豊かな言語活動をもつ言語文化の担い手の育成 【対象】中学1年生 対立から合意形成・意思決定へ ～こんなディベートどうでしょう?～ 【授業者】福西 昌平		【対象】高校Ⅱ年生(文学国語) 今までの“自分”とこれからの“自分”を 繋ぐ文学の力 【授業者】北村 翔己	(研究協議場所:高ⅢA) 小路口 真理美 大阪教育大学 多文化教育系 教授	
社会 地歴公民 高ⅠA教室 (北西翼3階)	公民的資質・能力の育成 【対象】中学3年生 ゲームで体感する、資本主義、そして グローバル経済 【授業者】平田 有宏		【対象】高校Ⅰ年生(公共) 理科だけが科学じゃない? ～「判断力」を育む公共の授業～ 【授業者】斎藤 大樹	(研究協議場所:高ⅠA) 峯 明秀 大阪教育大学 理事・副学長 社会科教育 教授	
数学 高ⅠD教室 (北西翼3階)	数学的ホンモノ体験の実践とその発信 【対象】高校Ⅱ年生(数学Ⅱ) 学びを照らすホンモノ体験～問いから始まる プロジェクション・マッピングの探究授業～ 【授業者】山本 修平		(研究協議場所:高ⅠD) 葛城 元 大阪教育大学 理数情報教育系 数学教育部門 特任講師		
理科 中:化学実験室 (東館2階) 高:生物実験室 生物講義室 (東館3階)	生徒が自学自走できる理科教育 【対象】中学2年生 体の反応をヒントに、暮らしを見直す理科 【授業者】立花 美穂		【対象】高校Ⅲ年生(「生物」選択者) 生成 AI を活用したホンモノ体験 ～高3が中3に授業～ 【授業者】森中 敏行	(研究協議場所:物理講義室) 大貫 守 愛知県立大学 教育福祉学部 教育発達学科 准教授	
音楽 音楽室 (南館4階)	知覚・感受って何だろう? -音楽科特有の「～すべき」を問い直す授業実践- 【対象】中学1年生 音楽の「よさや美しさ」を相対的に捉える 【授業者】古川 裕介		【対象】高校Ⅰ年生(「音楽Ⅰ」選択者) 合唱における音楽表現の探究 【授業者】古川 裕介	(研究協議場所:演習室) 長谷川 諒 エリザベト音楽大学 音楽文化学科 幼児音楽教育専修 専任講師	
美術 美術教室 (南館1階)	映像メディア表現での生徒の学びを考える 【対象】中学2年生 映像をよむ×映像をつくる 【授業者】宣 昌大		(研究協議場所:美術教室) 山崎 達壘 Film Education Lab 代表		
技術・ 家庭科 技術工作室 (南館1階)	教科横断的な学習を通じた授業実践と評価 【対象】中学3年生 生物育成による技術の見方・考え方の 形成と日常生活への転移 【授業者】木待 勝貴		(研究協議場所:技術工作室) 成田 一人 大阪教育大学 理数情報教育系 教授		
英語 高ⅢD教室 (北西翼4階)	自己、他者、題材との対話で深まる思考 ～生徒 × 教師で創る多様な「学び」～ 【対象】中学2年生 英語授業における多様な学び ～自由進度学習を手段として～ 【授業者】横山 聖		【対象】高校Ⅱ年生(英語コミュニケーションⅡ) インタラクションを通して、世界の見方を 再発見する CLIL 型の授業 【授業者】松田 真由子	(研究協議場所:高ⅢD) 箱崎 雄子 大阪教育大学 多文化共生教育系 英語教育部門 教授	
道徳 高ⅠD教室 (北西翼3階)	「問い」と「つながり」で学びを深める道徳 【対象】中学3年生 乗鞍修学旅行でのホンモノ体験を生か した道徳授業 【授業者】田中 真理子		(研究協議場所:高ⅠC) 小林 将太 大阪教育大学 総合教育系 准教授		
自由研究 図書室 (南館2階)	生徒の課題研究ポスター発表 【対象】中学1年生(課題の設定・情報の収集) 中学2年生(実証的研究)の抽出生徒 生徒一人ひとりが研究者 【担当者】島橋 尚吾		(研究協議場所:図書室) 堀 一繁 大阪教育大学 理数情報教育系 教授		



全体講演

「非認知能力の視点をデザインした授業の改善 ～探究を通じた深い学びへの試行錯誤～」

講師：^{じん たかゆき}神 孝幸 氏

文部科学省 国立教育政策研究所 教育課程
研究センター研究開発部学力調査官（併任）
教育課程調査官

（講演要約）

はじめに

私は今、文部科学省の国立教育政策研究所で、研究開発学力調査官・教育課程調査官として仕事をしています。ただ、もともとは長く高校の教員をしていて、教育委員会で指導主事も務めてきました。理科教育の学習指導要領や学習評価、全国学力・学習状況調査などに関わっています。今日は研究者としてではなく、現場で授業をしてきた一人の授業者として、非認知能力の視点を取り入れた授業改善について、これまでの試行錯誤をお話しします。子どもたちの深い学びをどう実現するか、そこが今日のテーマです。

授業デザインの核：内発的動機づけと非認知能力

授業づくりでいちばん大事なのは、最初の部分です。ここで子どもたちの内発的なやる気を引き出せるかどうか、その後をすべて決めます。このやる気こそが、非認知能力の一つです。たとえば、川の流れで岩石の形がどう変わるかを教える授業では、水に浮く吸水スポンジを水の中で振って見せます。すると削れた粉が沈んでいくんですね。子どもたちは「あれ？」と思います。この「不思議だな」「なんでだろう」という気持ちが学びのスタートになります。

授業は、この「あれ？」から本題に入り、最後に学んだことを自分の生活や考え方に結び付けることで、一つの学びのサイクルになります。子どもが「予想と違う」「どうしてだろう」と感じるズレを捉えて、それを課題にして解決へ導くと、全員が授業に乗ってきます。私はこの最初の5分に本当に命をかけています。

学習指導要領改訂に向けた議論の現状

今、学習指導要領の改訂に向けた議論が進んでいて、2025年9月25日に論点整理が出ました。ただ、これはまだ途中のまとめであって、決まったことではありません。議論では、小・中・高のつながりや教科同士の関係を整理し、言葉や構造をそろえてい

こうという方向が示されています。「基盤」という言葉がよく出てきていて、深い学びをどう実現するかが大きなテーマです。

また、「中核的な概念」という考え方で教科内容を整理しようという話も出ていて、これをこれまでの「見方・考え方」とどう関係づけるかが検討されています。「学びに向かう力、人間性等」の扱いや評価の仕方も見直され、評価の軸が増える可能性があります。さらに、指導要領そのものを表形式にしたり、デジタル化してクリックすると詳細が見られる形にしたりすることも検討されています。学校の裁量で授業時数を調整できる制度についても議論されています。こうした議論の過程は公開されていて、資料もすべて見られますし、会議もオンラインで視聴できます。

教育現場の多様性と学力調査の変革

今の教室はとても多様です。35人学級の中に、家庭であまり日本語を使わない子が1人くらい、発達の特性があるかもしれない子が3人くらい、不登校またはその傾向のある子が4～5人いる、という状況が普通にあります。

保護者の意識も変わってきています。調査を見ると、「学校が楽しいなら成績にはあまりこだわらない」と考える人が増えていて、子どもと学校の勉強について話をしない家庭も増えています。こうした状況では、従来の一斉授業だけでは限界があります。主体的・対話的で深い学び、そして個別最適な学びと協働的な学びの両方が必要になります。目指すのは、OECDのラーニングコンパス 2030 が示している子どもたちのウェルビーイングです。

全国学力調査も変わりつつあり、今はCBT化、つまりコンピュータで受けるテストへ移行しています。これによって、子どもの学力を経年で比較し、小学校から中学校まで一人ひとりの成長の推移を把握できるようになります。点数だけでなく、成長の過程を見る評価へ変わっていくということです。

（質疑応答は割愛）

次年度教育研究会

次回第73回教育研究会は、2026年11月7日（土）に開催を予定している。

教員によるポスター発表

今年度から公開授業以外に、教員によるポスター発表も実施した。次の資料は、国語科、地理歴史科、英語科（2）、保健体育科によるポスターである。

「集句」で漢詩を作ってみよう!

古典を自分事として読む 高校2年「古典探究(漢文)」授業実践報告

はじめに |

1. 研究の背景—漢文の授業における「ホンモノ体験」とは?—
私の考える「漢文の授業におけるホンモノ体験」とは、古い時代の中国で書かれた詩・文章を、生徒が「自分事として」、自分に引き付けて読むことである。そのための方法・手段として、私の1学期の授業では、まずは原書に触ってみる/訳を用い、現代の言葉ですらすら読む/自分に合った作品を探す/原文の意味を推測しながら、グループで協力して読んでみる等々、様々な取り組みを行った。

2. 授業のねらい

- ①漢詩・漢文を自分事として、自分に引き付けて読む。
- ②それらの言葉を使って詩を創作し、自分を表現する。



一学期の授業概要(全8時) |

1. あなたの好きな詩は? 漢詩を現代語訳で読む(第1時)

第1時では、現代語訳のみで書かれた詩(4作)を扱い、生徒一人一人が自分の気に入った詩を一つずつ選んだ。生徒が詩を選んだ理由としては「春の景色が鮮明に思い浮かぶから」「自分も試験後はこんな気持ちになったことがあるから」「この状況はクラス替えをした後の、今の自分の寂しさにぴったり」など、自分の経験や共感した点を挙げたものが多くみられた。

2. 人はなぜ「詩」や文章を書くのだろうか? 作者について知り、『詩経』大序を読む(第2時)

第1時で読んだ詩について、そのもとの姿が漢詩であることを初めて紹介。併せて作者や時代背景の情報を共有し、まとめる活動をした。そのうえで、人はなぜ「詩」や文章を書くのだろうかというテーマについて、『詩経』大序の言葉「詩は志の之く所なり」を読みながら考えを深めた。

3. 王維「竹里館」の世界って? 中国文学における出仕と隠逸(第3~5時)

教科書に掲載されている王維「竹里館」の詩には、「深林 人知らず」という句がある。「深林ってどんなところ?」「なぜ人は深林へ向かうの?」という視点から、嵇康「絶交書」および陶淵明「帰園田居」を読み、中国文学における大きなテーマ「出仕と隠逸」を整理した。

4. 合わせると、どんな物語? 陶淵明「桃花源記」をジグソー法で読む(第6~7時)

第5時で触れた隠逸の詩人・陶淵明の「桃花源記」について、まず原文を5つのパートに分けた。それらを各生徒で分担し、個人・ペアで内容を推測したうえで、ジグソー法を用い物語を完成させる作業を行った。

「集句」で漢詩を作ってみよう!

授業実践(第8時) |

1. 漢詩創作の方法 — 「集句」とは?

南宋の文天祥という詩人には、杜甫の詩を組み合わせで作った『集杜詩』200首が残されている。宋王朝の滅亡後、モンゴルの獄中に囚われた文天祥が、杜甫の心情に自らを重ね合わせて作ったものである。

2. 取り組みのねらい

文天祥の方法に倣い、自分自身に引き付けて実際に漢詩を作ってみる。

3. 授業の流れ

- ①まず、文天祥の詩が「集句」によってできていることに気付く。
- ②次に詩句をリストから選び、オリジナルの詩を作る。



↓授業で用いた
集句リスト



現代語訳は川合康三『中国名詩選(上・中・下)』(岩波文庫、2015年)を参考にした。

生徒の“集句”作品 |



↑お互いの作った詩をノートに書いて共有し、良いところ・気付いたことなどコメントを書き込む。
・部活頑張ってほしい、かっこいい!
・(他の生徒からのコメント)部活動中の苦しみが伝わってくる。

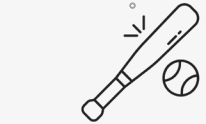
同じ句を使って、人によつて組み合わせが違えば異なる表現に。

看君終日常安臥

君の終日常に安臥するを見る。一日いつだってのんびり帰る帰宅部を眺める。

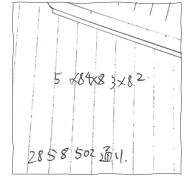
吾道竟何之

吾が道竟に何にか之かん



黄塵行客汗如漿

黄塵の行客汗漿の如し 毎日汗まみれになって野球をしている。何れぞ憂いを懐きて心煩悩するなぜこんなにしんどいのか。



↑生徒のメモ書き
今回の集句で、詩は何通り作れるのか気になってきた...
計算してみると...?

散髮乘夜涼

髪を散じて夜涼に乗ず

夜深忽夢少年事

夏の夜、髪を下ろして縁側に腰を下ろす。夜深くして忽ち夢む少年の事

吾道竟何之

吾が道竟に何にか之かん

夜半無人私語時

夜半人無く私語の時

誰にも聞かれない夜の私の本音。



おわりに |

1. 授業実践を終えて

1学期の授業実践を通して、生徒は漢詩・漢文を「自分にもわかるもの」「自分の気持ちと重なるもの」として読むことができた。最後の「集句」の実践においても、自分の日常生活に引き付けたり、高校生としての心情を漢詩の形で表現する様子が多数見られた。

2. 今後の展望

2学期の実践では、これらの句が元々どのような詩であったのかを読み解いたり、史伝や思想を身近に読む実践を引き続き行いたい。

第72回教育研究会「学び合う生徒と教師~自走する生徒の育成を目指して~ ホンモノ体験×認知科学」(2025年11月8日(土)ポスター発表)

高校歴史科における探究型授業の開発

ーフィールドワークを通して〈これまで〉〈いまここ〉と向き合い、〈これから〉を展望する授業ー

本報告は、大阪教育大学の令和7(2025)年度大学・附属学校園連携事業として現在進行中の、櫻澤 誠准教授(多文化教育系/プロジェクトリーダー)、手取義宏教授(多文化教育系/附属中学校校長・附属高校校舎主任)、報告者 古澤(附属高校)の3名による高大連携共同研究の中間報告である(実践の概要報告にとどめる)。

研究の目的・背景

本研究の目的は、生徒たちが主体的・対話的で深く考える高校歴史科目の探究型授業の開発を行うことにある。生徒たちがこれからの予測困難な時代を生き抜くためには、歴史総合や世界史探究などの歴史科目を通じて「世界の歴史の大きな枠組みと展開に関わる諸事象について、よりよい社会の実現を視野に課題を主体的に探究しようとする態度」を育み、「多面的・多角的な考察や深い理解を通して、他国や他国の文化を尊重することの大切さについての自覚などを深める」こと(新学習指導要領)が重要である。

リーダーの櫻澤は、新学習指導要領の実施に先立ち、H30・R1年度に「新科目『歴史総合』の新設に対応するプロジェクト」を推進し、その成果を教員養成課程や教職大学院で発揮してきた。R6年度には「みらい教育セミナー 新しい『歴史総合』の授業を体験してみよう」を実施。手取はR5年度より社会科教育コースの必修科目「社会科内容構成演習」を櫻澤とチームティーチングにて担当し、歴史科目の探究型授業開発の指導を行ってきた。古澤は、R6年度附属学校園教員と大学教員との研究交流会で、「〈下から〉の参加」「〈普通の人びと〉がどのように行動したか」という視点から、現代社会の諸問題(ポピュリズムやナショナリズム、SNS上の「炎上」や排除の動き、差別や同調圧力)と比較しながら探究する、前任教(附属高等学校池田校舎)の「日本史探究」の実践について報告した(ポスター)。

研究計画と経過

本研究がめざすのは、戦跡を含む史跡や資料館を訪ね生徒たちが「ホンモノ」にふれるフィールドワークを通じて、過去〈これまで〉の戦争だけでなく、現在〈いまここ〉につづく偏見や差別、自由の侵害などの問題と生徒が主体的に向き合い、未来〈これから〉の世界の展望を描く能力を育む授業の開発である。取り上げる題材は、満蒙開拓、ハンセン病、沖縄戦、第五福竜丸をめぐる問題などである。

古澤は、高校I年「歴史総合」、II年「総合ブルーフ」*の古澤講座、III年「世界史探究」の授業の開発・実践を行いながら、研究会での実践報告を通じて検証と改善を重ねている。夏季には長野・茨城・東京・大阪でフィールドワークの下見を行い、2学期には櫻澤をゲスト講師に迎えて授業を深化させ、大阪市内でフィールドワークも実施した。さらに、櫻澤・手取「社会科内容構成演習」受講生による授業見学や、手取「中等社会科(地歴)教育法I」や櫻澤「みらい教育セミナー」において、検証・改善を続ける。3月には研究交流会で成果を発表し、報告書および論文投稿の準備を進める。

*「総合ブルーフ」…本校の学校設定科目のうちの一つ。2年次にSSHの「ブルーフII」を選択しない生徒を対象とし、7～8人の教員が担当し、教員ごとに講座を立て、生徒たちは自分の関心に応じて講座を選択する。具体的な日程と今後の予定は下の表の通りである。

日程	共同研究	報告者の研究・調査
7/5(土)		第91回関西世界史教育研究会での実践報告「(戦後)80年」から何を考えようか〜「共事者」を育む授業〜
7/20(日)	櫻澤「みらい教育セミナー〜探究型教育実践力向上セミナー(歴史分野)〜」第1回への参加(古澤)	
7/31(木)	手取「中等社会科(地歴)教育法I」第13回歴史的分野の授業構成と展開」のゲスト講義(古澤)	
8/3(日)		フィールドワーク下見:満蒙開拓平和記念館(長野県下伊那郡阿智村)
8/10(日)~11(月)		フィールドワーク下見:水戸市内原郷土史義勇軍資料館/日本農業実践学園【旧日本国民高等学校】/満蒙開拓青少年義勇軍内原訓練所跡ほか(茨城県水戸市)
8/15(金)~16(土)		フィールドワーク下見:靖国神社、遊戯館/千鳥ヶ淵戦没者墓苑/慰霊館/国史公文書館/東京国立近代美術館/AK Contemporary/しよけい館【戦傷病者史料館】/機運者たちの記憶ミュージアム【平和祈念展示資料館】(東京都)
8/19(火)	「記録をひらく 記憶をつむぐ」展(東京国立近代美術館)	フィールドワーク下見:興亜拓殖訓練所跡【大阪公立大学附属植物園】(大阪府茨城市)
8/24(日)	櫻澤「みらい教育セミナー〜探究型教育実践力向上セミナー(歴史分野)〜」第2回への参加(古澤)	
8/26(火)	総合ブルーフ古澤講座「(戦後)80年」に何を考えるか」のゲスト講義(櫻澤)	
9/30(火)		総合ブルーフ古澤講座 フィールドワーク:「軍都大阪をめぐる」(ピースおおさか/大阪城公園内の戦跡・記念碑) (大阪市)
10/22(火)	I年C組「歴史総合」(古澤)の履学と研究協議(櫻澤・手取・社会科内容構成演習、受講生)	
10/28(火)	III年「世界史探究」(古澤)の履学と研究協議(櫻澤・手取・社会科内容構成演習、受講生)	
今後の予定 12月~3月	研究交流発表準備・報告書作成・記事投稿準備(大阪教育大学紀要「研究収録第68集」等)	
3/4(水)	附属学校園教員と大学教員との研究交流会での研究成果発表	

授業実践

●I年歴史総合・II年総合ブルーフ(古澤講座)・III年世界史探究 3科目共通オリエンテーション「〈戦後〉80年」に何を考えるか〜「先の大戦」とは?「終戦」とは?〜



歴史総合のようす

【授業の概要】

- SQ1) 「(戦後)80年」の「戦後」の起点はいつ?(個人→ペア)
- SQ2) 資料「天皇陛下お誕生日に際し」を読んで疑問点は?(個人→ペア)
- SQ3) 「先の大戦」とはどの戦争のことをさすか?(個人→ペア)
- SQ4) 次の戦争(①第二次世界大戦 ②太平洋戦争 ③アジア・太平洋戦争 ④十五年戦争 ⑤大東亜戦争)を説明できるか?(個人→ペア)
- SQ5) 「先の大戦」にふさわしいと思うのはどの名称?(個人→ペア)
- SQ6) 「先の大戦」の「終戦」はいつ?(個人→ペア)
- SQ7) 資料「(終戦の日)世界各国・地域ではいつなのか」を読んで疑問点は?(個人→ペア)
- SQ8) 「8月15日の靖国神社」(講義)→2024年終戦記念日の靖国神社のようすを写真で紹介しながら、どのような問題点や論点があるかを取り上げ、歴史認識や慰霊と追悼などについても考える(全体)
- MQ) 「(戦後)80年に何を考えるか」→現代的な諸課題や自分自身の関心事にむすびつけてどのようなことがいえるか?(個人→全体)

●I年歴史総合「〈戦後〉80年」の夏(夏休みの課題とその共有)

上記オリエンテーションをふまえたプレゼンテーションのスライド作成を、夏休みの課題とした。テーマは次の3つのなかから1つを選択する。

- A 「〈戦後〉80年」をテーマにした新書の新刊紹介
- B 「〈戦後〉80年」をテーマにした観光プランの提案
- C 「〈戦後〉80年」にまつわる展覧会等の紹介

2学期最初の授業に、ペアでプレゼンテーションを行い、「〈戦後〉80年」の夏に各自が意識したことや昨年までとの意識の変化について議論した。



相互プレゼンテーションのようす

考察と今後の課題

各実践後の生徒のふりかえり(ワークシート等)の記載からは、予想以上に主体的に考察しているようすがうかがえる。研究会等での実践報告の質疑応答や大学生のアンケート回答などもあわせて分析したい。また、フィールドワークの下見の成果は授業中に紹介して生徒の反応を観察している。概ね好評であるが、フィールドワークの行き先として実行が現実的かどうか、今後検討を加えていく。これらを総合し、さらなる開発・実践・検証を行いたい。

本研究の成果は、3月開催の附属学校園教員と大学教員との研究会で発表するほか、本学研究紀要や本校研究収録等でも報告する予定である。

主要参考文献

- 赤澤史朗「靖国神社「殉国」と「平和」をめぐる戦後史」岩波現代文庫 2017年
- 宮内庁サイト「天皇陛下お誕生日に際し(令和7年)」
https://www.kunaicho.go.jp/page/kaiken/show/367 (2025.10.30閲覧)
- 小松理徳『新復興論 増補版』ゲンロン 2021年
- 櫻澤誠『沖縄現代史 米国統治、本土復帰から「オール沖縄」まで』中公新書 2015年
- 佐藤卓己『増補 八月十五日の神話-終戦記念日のメディア学』ちくま学芸文庫 2014年
- ザラ・スウェン「ドイツと日本における「終戦」「解放」「脱占」の記憶」『ヨーロッパ研究』第7号(東京大学大学院総合文化研究科・教養学部ドイツ・ヨーロッパ研究室)2008年pp.5-28 https://www.desk.c.u-tokyo.ac.jp/download/es_7_Saaler.pdf (2025.10.30閲覧)
- ハブボスト日本編集部「(終戦の日)世界各国・地域ではいつなのか。世界で第二次世界大戦が“終わった”日は?」2022年8月15日
https://www.huffingtonpost.jp/entry/story_jp_62f621d4e4b045e6f6ac9923 (2025.10.30閲覧)

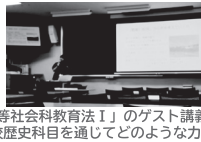
●II年総合ブルーフ 古澤講座

「〈戦後〉80年」に何を考えるか

【講座概要】「先の大戦」や「あの戦争」とは何を指すのか、いつを起点に「80年」と換算するのかを考える導入から、慰霊や追悼の問題、ジェンダー、プロパガンダ、映画や音楽など、さまざまな切り口から戦争について考える講義、ゲストスピーカーによる講演、史跡や博物館見学などのフィールドワークを通して、自分なりのテーマを設定し、グループに分かれて探究する。



左:満蒙開拓青少年義勇軍内原訓練所跡
右:弓指寛治「不承不承」現代アートが描く義勇軍展(水戸市内原郷土史義勇軍資料館)



「中等社会科教育法I」のゲスト講義
高校歴史科目を通じてどのような力を育むか



世界史探究の授業見学後の大学生との協議
(櫻澤・手取・古澤)



櫻澤によるゲスト講義
「沖縄戦」は戦後どのように語られてきたか



櫻澤の講義で歴史教科書における沖縄戦の記述に関心が集まったため、次の授業で中学校社会科歴史教科書の全社比較を実施



グループ探究のテーマ探しを兼ねたフィールドワーク「軍都大阪をめぐる」
ピースおおさかでの見学後、大阪城公園内の戦跡・記念碑をめぐる

生徒の主体性を伸ばす英語科の取り組み～大阪観考～

専任第1号 (第04)

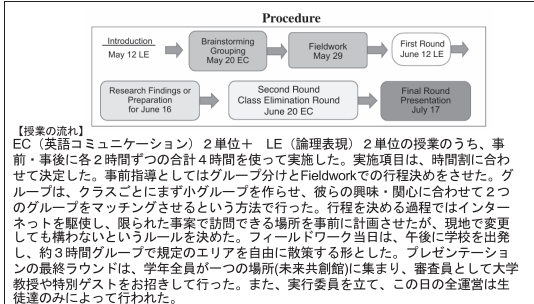
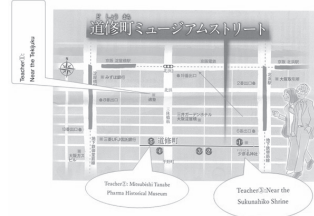
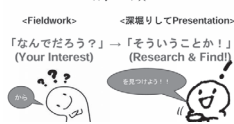
附属高等学校英語科 乾まどか・曾野玲子

【背景】

この取り組みは、令和5年度に「英語科ホンモノ体験」として立ち上げた企画の一つである(令和6年度は教員の人れ替えもあり実施せず)。令和7年度は二度目の実施になる。「大阪」の地域を「観て考える」ことを目的にして行事名を名付けた。教室での学びを校外(社会)とつなげ、英語力の育成を目指したものである。令和5年度は、環状線の内側を地域として生徒に選ばせたが広範囲であり、また内容の共有に課題が残った。そのため、令和7年は、大阪の代表的な場所として、「葉の街大阪」をテーマに博物館を見学しながらの探究活動として実施した。田辺三菱製薬の博物館と通塾を訪問のみ教師から提示した訪問場所とし、それ以外の箇所は生徒に委ねることとした。

【目的】

1. 研究を楽しむ
2. 大阪の文化に関する知識を広げる
3. 大阪の歴史的な魅力や価値を発見する
4. 協働性を高める
5. プレゼン能力を向上させる



【授業の流れ】 EC (英語コミュニケーション) 2単位+ LE (論理表現) 2単位の授業のうち、事前・事後に各2時間ずつの合計4時間を使って実施した。実施項目は、時間割に合わせて決定した。事前指導としてはグループ分けとFieldworkでの行程決めをさせた。グループは、クラスごとにまず小グループを作らせ、彼らの興味・関心に合わせて2つのグループをマッチングさせるという方法で行った。行程を決める過程ではインターネットを駆使し、限られた事業で訪問できる場所を事前に計画させたが、現地で変更しても構わないというルールを決めた。フィールドワーク当日は、午前中、学校を出発し、約3時間グループで規定のエリアを自由に散策する形とした。プレゼンテーションの最終ラウンドは、学年全員が一つの場所(未来共創館)に集まり、審査員として大学教授や特別ゲストをお招きして行った。また、実行委員を立て、この日の全運営は生徒達のみによって行われた。

【生徒に配ったワークシートの一部】
事前指導でBrainstormingに用いたもの(左)とFieldwork当日に生徒に持たせたもの(右)。
当日のチェックポイントは3か所設け、三菱田辺製薬博物館にも協力いただいたオリジナルスタンプを使用した。

【3段階によるプレゼンテーション】 自分の意見を論理的に話す能力の育成

Presentation Contest		First Round	Second Round	Final
Date	June 12	June 20	July 17	
Class	LE	EC	EC&LE	
Place	Classroom	Classroom	Tennō Future Education Innovation Hub	
Time Limit	1 minute per presentation.	3 minutes per presentation.	5 minutes per presentation.	
Participants	Participants present within small groups of 4 people in a classroom.	10 winners from Round 1 present to the entire class.	8 finalists from the grade level.	
Selection:	After all presentations, each group selects 1 winner to advance to Round 2.	The class selects 2 finalists to advance to the Final.	Top 3 presenters receive prizes.	
Audience	Classmates	Classmates	Classmates, Professors and special guests	

How to evaluate

- 1 Evaluate other students with A, B or C in each perspective
- 2 Select the best student in your group and give him/her S
- 3 Choose one more person who did an excellent research and give him/her A if any (E.L.I.P.S.)

Figure 1.

No.	Name	Content	Clarity	Delivery	Engage	Time/NI	Total Score/(15)	S/A
1		3	2	1	3	2	1	3
2		3	2	1	3	2	1	3
3		3	2	1	3	2	1	3
		3	2	1	3	2	1	3

Figure 2.

【評価に関して】 評価する能力の育成
第一ラウンドは、4人グループになり、発表者が立ちスライドを見せながら1分間班内でのプレゼンテーションを行った。評価シート (Figure 1) を用いて生徒達に代表を決めさせた。
第二ラウンドは、評価シート (Figure 2) を用いて、教師・生徒共に評価し、両者の結果を踏まえてクラス代表を選出した。

【生徒がまとめたポスター】

表紙の能力の育成

「BONTAN-AME」THE RETRO PACKAGING
Recently, I saw some antique packages in Osaka-Kansai. They interested in my package. Using them, I found an Bontan-Anme and created it.

The long life design
This design was made in 1925 in Kagoshima. Also the packaging design has changed from 1925 to the 2025. But there is almost no change in the color words. This design is loved for a beauty.

How beautiful this contrast between the blue and yellow is!
This color balance has kept from the most recent year. This color is perfect. Do you know about Bontan-Anme?

The beloved "Bontan-Anme pattern"
The Bontan-Anme is very popular, and people like it very much in the present time. But we are not using it now. Now the Bontan-Anme design is called the "Bontan-Anme pattern" and it is used in various products. This package will continue to be loved.

プレゼンコンテストの第2ラウンド以降に残らなかった生徒は、プレゼンを行う代わりに今回の学びを1枚のスライドとしてまとめた。それによって、全員がこの活動で自己表現を他者へ伝える場を設けた。

【生徒アンケート】 Q. 今回の大阪観考の事前学習から実施までの振り返り感想を書いてください。

【総合感想(生徒のコメントより)】

- ・自分に興味のない分野でも、求心的に取り組むことができるように、事前の準備の段階から楽しく行えた点良かった。街を訪れることでネットで調べより深く知識を身につけることができ、また、今まで関わったことなかった人とも喋ることができて楽しかった。
- ・テーマの捉え方によって理解の深度が変わるのが良かったです。テーマの中でオリジナリティのある発想をすることがなかなか難しかったです。また、プレゼン大会については、道修町で知ったことや学んだこと、追加で自分で調べたことだけでなく、過去に体験したことや自分の趣味と関連させている方が面白くて引き付けられました。これからはたくさん経験を様々な分野で役立つように吸収していきたいと思いました。

【考察】

3段階にわたって実施したプレゼンテーションコンテストを通じて、生徒たちは互いの発表から多くの刺激や着想を得ながら、自らのテーマについてより深く考察することができた。回を重ねるごとに英語力や表現力、プレゼン技術の向上も顕著であり、特にフィナルラウンドで発表を行った生徒たちは、大きな達成感と自信を得ていた。その姿は聴衆であった生徒たちにも良い影響を与え、次回に向けての目標意識や学びへの意欲を高めるきっかけであると考えられる。また、最終ラウンドのプレゼンコンテストは運営委員を作り、本校SSH研究主題である「国際的に協働する文理融合型学習者の育成を核とした学習者も多参するカリキュラムマネジメントの実践とその普及」にある学習者も参画する企画を生み出した。学年を動かすことの難しさと達成感を味わうことができた。本活動全体として、生徒一人ひとりの探究心を育むだけでなく、実社会とつながる学びの意義を実感させる有意義な経験となった。

【謝辞】

プレゼンコンテスト実施にあたり大阪教育大学教育学部・多文化教育系教授 箱崎雄子先生、大阪教育大学多文化教育系特任准教授 王 林鋒先生、及び附属平野中学校英語科高藤賢治先生には審査員を務めていただき、生徒たちへ専門的なアドバイスを賜り感謝しております。高大連携の絆を生かして、今後もご指導いただきますようよろしくお願い申し上げます。三菱田辺製薬CEOオフィス 松本 佑子さんには道修町への施設見学の協力、またコンテスト審査員を務めていただき社会で必要な国際性について生徒たちに刺激を与えていただきました。皆様に感謝申し上げます。

学習者をつくるルーブリックの効果 —英作文パフォーマンス課題を通して—

1. 背景

学習者が見通しを持ち、課題に取り組むことができるよう、著者は学習者とともにパフォーマンス課題評価用のルーブリックを作成する取り組みをおこなっているが、これまでその効果を定量的に示すことができなかった。

ルーブリック作成プロセス

- ①教師が生成AIを活用して質が異なる作文例を複数作成する
- ②学習者がこれらの作文例を比較・分析する
- ③②をもとに学習者が班でルーブリック記述文を作成する
- ④各班のルーブリックを比較し、クラス全体で最も良いものを選ぶ
- ⑤各クラスで選ばれたルーブリックを教師が1つにまとめる

A 特に優秀	・客観的な根拠や具体例が複数ある ・論理表現が適切に使われている
B 全員到達可能	・サポートとして不十分でも、客観的な根拠や具体例がある ・論理表現が使われている
C 頑張りよう	・根拠や具体例がない、客観性を欠く ・論理表現が使われていない

図1 課題1で採用したルーブリック

2. 目的と検証方法

目的

学習者がルーブリック作成に参画することが課題の達成度に与える効果を定量的に明らかにするため

方法

2回の英作文課題を設定し、表1の通りA群・B群においてルーブリック作成への参画に差を設けた。

表1 課題とルーブリック作成の有無

	課題1	課題2
A群	ルーブリック作成	ルーブリック提示のみ
B群	ルーブリック提示のみ	ルーブリック作成

課題のスコアをルーブリックの達成度に応じて1～5の値で表し、①A群・B群の課題1のスコアを用い、ルーブリック作成の有無による差を検証
②B群の課題1と課題2のスコアを用い、ルーブリック作成への参画の前後でのスコアの変化を検証
③2回の課題を終えてのリフレクションから、①②の原因を分析

3-1. 検証結果①：課題のスコアのt検定

- ①ルーブリック作成の有無による差はあるのか？
有意差は認められなかった（図2）

	n	M	SD
A群	66	3.35	0.79
B群	67	3.22	0.79

p=0.36

図2 対応のないt検定の結果

- ②ルーブリック作成による変化はあるのか？
有意差はないものの有意差に近しい結果だった（図3）

n	pre		post		p
	M	SD	M	SD	
66	3.20	0.80	3.44	1.16	0.07

B群のうち、2回のデータがある者のみ

図3 対応のあるt検定の結果

結果

- ①ルーブリック作成に参画した集団としなかった集団とではスコア（英作文の質）に有意差は認められなかった
- ②同一集団においては、有意差はないものの、ルーブリック作成を経験することでスコアの向上が見られた

3-2. 検証結果②：学習者のリフレクション

課題1・2の両方を終えてから、学習者に以下の2つの設問を含めたリフレクションをGoogleフォームで実施した。

設問1 writing課題の評価基準をみんなで作りましたが、自分たちでつくった時とそうでない時で課題への取り組みは変わりましたか？
設問2 「変わった」場合はどのように変わったのか、「変わらなかった」場合はその理由を教えてください。

設問1の回答は図4の通りであった。設問2については、「変わった」理由は評価基準を意識して書くことができたからという趣旨のものが多く、「変わらなかった」理由はこれまでと基準が大きく変わらなかったからという回答がほとんどであった。

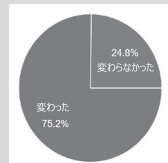


図4 設問1の回答

結果

- ①学習者の約4分の3はルーブリック作成の効果を実感した
- ②ルーブリック作成によって、学習者は評価基準を意識して課題に取り組むことが促された
- ③学習者が作成に参画したルーブリックがこれまでの評価基準と似ていた、あるいは学習者がもともと評価基準を意識していた場合は、ルーブリック作成の効果は感じにくい

4. 考察

検証結果より、次のことが示唆される。

- ①学習者がルーブリック作成に参画することは、評価基準を意識して課題に取り組むことを促す（学習者エンゲージメントを高める）
 - ②学習者が評価基準を意識することは、課題の達成度（英作文の質）の向上の一因となり得る
- ただし、検証方法において対象者や課題の数が限定的で、課題のレベルや内容を十分考慮できていない点に留意する必要がある

参考文献

サックシュタイン、スター著、高瀬裕人・吉田新一郎訳（2018）『成績をハックする 評価を学びにいかす10の方法』新評論
サラ・マーサー、ソルダン・ドルニエイ著、鈴木章能・和田玲訳（2022）『外国語学習者エンゲージメント 主体的学びを引き出す英語授業』アルク
立花直樹（2025）「パフォーマンス課題に向けて学習者とルーブリックをつくる 一生成AI活用の可能性—」『研究取録』大阪府高等学校英語教育研究会、No. 60、1-5頁

ベースボール5を活用した学び合う体育授業の実践と検証

【はじめに】

本研究は、新興スポーツである「ベースボール5（Baseball 5）」を中学校第1学年の体育授業に導入し、生徒が協動的に学ぶ授業づくりを実践とその効果を検証することを目的とする。この競技の最大の特徴は「ボール1つでどこでもできる」シンプルさと、男女混合で行うルール構成にある。21メートル四方のプレイエリアがあれば屋内外を問わず実施でき、野球やソフトボールに比べて運動経験・体格差・性別によるハンディが小さい。そのため、体育の授業において全ての生徒が参加しやすいスポーツである。また、チームワークや戦術的思考を必要とする競技構造は、学級全体の一体感や相互理解を深める教材としての可能性を有している。一方で、学校現場における実践研究はまだ少なく、特に中学校段階での指導法や学びの効果に関する知見は限られている。そこで本研究では、ベースボール5を用いた体育授業の実践を通じて得られた知見を報告する。

【ベースボール5の概要】

公式ルールと授業内でのルール概要を表1に、コート図を図1に示した。本研究では、Baseball 5の公式ルールを基に、中学校体育授業の実践に適した形へと調整した授業ルールを用いた。

授業ルールでは、安全性と運営の円滑さを考慮し、1チーム9人とした。試合は時間制で行い、3アウトごとに攻守を交代し、後攻の攻撃が終了した時点の得点で勝敗を決定した。守備においてはグローブの使用を任意とし、ポジションは一塁手、二塁手、三塁手、遊撃手、ミッドフィルダー2人の計6人で構成した。攻撃では、手のひらまたは拳でボールを打ち、ノーヒットゾーンやファウルゾーンへの打撃、あるいは空振りを含めて3回行うとアウトとなるルールを採用した。

このように、授業ルールは公式ルールの基本的な枠組みを保持しつつ、安全性や運営のしやすさを重視して、生徒とともに検討・構成したものである。

なお、本研究では世界野球ソフトボール連盟（WBSC）公認球を使用した。テニスボールとほぼ同じ大きさで、テニスボールより約20g重く、ゴム製の弾力があるものを用いた。

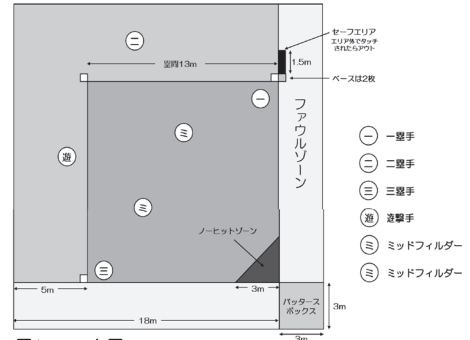


図1：コート図

表1：ルールの概要

公式ルールの概要	授業ルールの概要
◇基本ルール <ul style="list-style-type: none">5人制、「男子3人、女子2人」もしくは「男子2人、女子3人」ピッチャー、キャッチャーは存在しない5インニング（3アウト）	◇基本ルール <ul style="list-style-type: none">1チーム9人制、「男子5人、女子4人」もしくは「男子4人、女子5人」ピッチャー、キャッチャーは存在しない時間制 3アウト交代 後攻の攻撃が終わっている回までの得点で勝敗を決める
◇ディフェンス（守備） <ul style="list-style-type: none">グローブは使用せず、素手でキャッチするポジションは、一塁手、二塁手、三塁手、遊撃手、ミッドフィルダー	◇ディフェンス（守備） <ul style="list-style-type: none">グローブは使用は任意で、素手でもよいポジションは、一塁手、二塁手、三塁手、遊撃手、ミッドフィルダー（2人）の6人
◇オフェンス（攻撃） <ul style="list-style-type: none">バットは使用せず、手のひらまたは拳でボールを打つノーヒットゾーンへの打撃やホームランはアウトランナーを一塁→二塁→三塁と進め、ホームに返せば1点獲得	◇オフェンス（攻撃） <ul style="list-style-type: none">バットは使用せず、手のひらまたは拳でボールを打つホームランはアウトノーヒットゾーンやファウルゾーンへの打撃、または空振りのいずれかを合計して3回するとアウトランナーを一塁→二塁→三塁と進め、ホームに返せば1点獲得

【授業の実践】

対象者：大阪教育大学附属天王寺中学校第1学年2クラス

男子37名、女子35名の計72名

実施期間：令和6年11月26日から令和6年12月9日まで

学習形態：男女共習

単元配当時間：50分×7時間

授業の流れ

- 第1時 オリエンテーリング、キャッチボール
- 第2時 キャッチボール、打撃練習
- 第3～5時 チーム練習、ゲーム形式でルール理解を深める
- 第6時 教室内でチーム作戦会議（図3）
（打順、ポジション、チーム練習の内容など）
- 第7時 チーム練習、まとめのゲーム

チーム内で役割を定めチーム活動を中心に授業を展開した。役割は「リーダー」「副リーダー」「用具」「コーチ」「記録」の5つである。各役割の仕事内容を表2に示した。

表2：チーム内役割の仕事内容

役割	仕事内容
リーダー	全体のまとめ役
副リーダー	出欠・遅刻の確認・報告、ミーティングの司会
用具	道具の準備・片付けの主任
コーチ	準備体操、練習メニューおよび作戦の考案の主任
記録	練習・試合記録用紙の記録、時間管理の主任



図2：試合の様子



図3：第6時
チーム作戦会議の様子



図4：練習・試合記録用紙

【引用・参考文献】

WHAT IS BASEBALL5 ベースボール・ファイブ競技説明 発行：一般財団法人全日本野球協会 BASEBALL5 JAPAN 事務局 2023年3月14日
性別を問わないアーバンスポーツ「ベースボール5」の提案 体育科教育 発行：大修館書店 2024年9月1日

【成果と課題】

授業後のアンケートから得られた成果と課題

成果

- 高い学習満足度が得られた。
- 「実際にベースボール5を行ってみてどうでしたか？」という質問に対し、全体の93%の生徒が「楽しかった」「まずまず楽しかった」と回答しており、多くの生徒がベースボール5の授業を肯定的に受け止めていた。（図5）

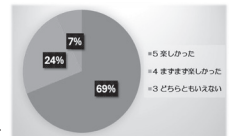


図5：アンケートの結果

- 誰もが楽しめる教材としての有効性が示された。
- バットなどの専門的な用具を使わないため、運動が得意・不得意に関わらず参加しやすいという意見が見られた。
- 協動的な学びが促進された。
- チームで作戦を考えたり、役割を分担したりする中で仲間と協力する楽しさや戦略性の面白さを感じた生徒が多く、協働学習の観点からも効果が見られた。

課題

- ルール理解の難しさが一部に見られた。
- 「もう少しルールが簡単だと良い」「瞬時の判断が難しかった」という意見があり、初心者にも分かりやすい段階的なルール導入が求められる。
- 用具への期待の違い。
- 「バットを使って打ちたかった」という意見もあり、従来の野球との違いに物足りなさを感じた生徒もいた。活動の目的や特徴を事前に理解させる工夫が必要である。

【まとめ】

ベースボール5は、簡易な用具で多くの人が楽しめる新しい球技教材として有効であることが確認できた。一方で、ルール理解や球技特性への慣れを支援する指導の工夫が今後の課題として挙げられた。

参会者アンケート

1. ご所属をお答えください。(回答 114 件)

- 小学校教員…………… 0.9%
- 中学校教員…………… 52.6%
- 高校教員…………… 15.8%
- 大学等教員…………… 5.3%
- 教育委員会…………… 3.5%
- 大学院生…………… 8.8%
- 大学生…………… 17.5%
- 専門学校教員…………… 0.9%
- 塾の講師…………… 0.9%

2. よろしければお名前をお書きください。

3. 教員の方は在職年数をお答えください。

(回答 86 件)

- 1 年未満…………… 1.2%
- 1～4 年…………… 12.8%
- 5～9 年…………… 19.8%
- 10～19 年…………… 41.9%
- 20～29 年…………… 16.3%
- 30 年以上…………… 8.1%

4. よろしければ、ご勤務されている学校、在学されている学校、勤務先等のご所属をお書きください。

5. 本校の研究会を何でお知りになりましたか？

(複数回答可) (回答 113 件)

- 本校からの案内状…………… 19.5%
- 本校のHP…………… 44.2%
- 職場の同僚や知人から…………… 21.2%
- 本校の教員より直接…………… 12.4%
- 大学からの案内・紹介…………… 5.4%
- ゼミ・大学の授業の一環…………… 2.7%
- 大学・大学院の先生から…………… 4.4%
- 大学教職課程のプログラム…………… 0.9%

6. 参加された理由をお答えください。(複数回答可)

(回答 115 件)

- 研究会のテーマに関心があった…………… 47.0%
- 教科など発表内容に関心があった…………… 74.8%
- 全体講演の講師・内容に関心があった…………… 26.1%
- 職場の同僚や知人の勧め…………… 16.5%
- その他…………… 8.1%

7. 本校の研究会への参加経験についてお答えください。(回答 114 件)

- 初めて参加した…………… 59.6%
- 以前に 1～2 度参加した…………… 28.1%

以前に 3 度以上、参加したことがある…………… 12.3%

8. 参加されたプログラムを全て丸で囲んでください。(回答 115 件)

中学

国語 8.7% 社会 17.4% 理科 27.8% 音楽 4.3%
美術 12.2% 技術・家庭科 0.9%
英語 14.8% 道徳 13% 自由研究 13%

高校

国語 7% 地歴公民 18.3% 数学 16.5%
理科 24.3% 音楽 6.1% 英語 12.2%

協議

国語 5.2% 社会・地歴公民 16.5% 理科 20%
数学 10.4% 音楽 3.5%
美術 12.2% 技術・家庭科 0.9% 英語 9.6%
道徳 2.6% 自由研究 0.9%

全体講演 61.7%

9. 授業・協議について、満足度をお答えください。(回答 113 件)

- とても満足…………… 79.6%
- やや満足…………… 17.7%
- やや不満…………… 2.7%
- とても不満…………… 0.0%

10. よろしければ、理由をお答えください。

11. 授業・協議は、自校での実践に役立つ内容であったか、お答えください。(回答 108 件)

- とても役立つ内容であった…………… 68.5%
- どちらかという役立つ内容であった…………… 27.8%
- あまり役立つ内容でなかった…………… 2.8%
- まったく役立つ内容でなかった…………… 0.9%

12. よろしければ、理由をお答えください。

13. 以前に参加された経験のある方のみ、お答えください。以前の本校研究会の内容が、自校での実践に役立っているか、お答えください。

(回答 44 件)

- とても役立っている…………… 61.4%
- どちらかというと役立っている…………… 31.8%
- あまり役立っていない…………… 4.5%
- まったく役立っていない…………… 2.3%

14. よろしければ、理由をお答えください。

15. 全体講演について、満足度をお答えください。
（回答 90 件）
- とても満足…………… 72.2%
 - やや満足…………… 26.7%
 - やや不満…………… 1.1%
 - とても不満…………… 0.0%
16. よろしければ、理由をお答えください。
17. 今回の教育研究会について、ご意見・ご感想などがございましたら、お書きください。

<アンケート分析レポート>

1. 参加者の属性（Q1～Q4）

所属：中学校教員と高校教員が最も多く、次いで大学院生・学生、教育委員会関係者が見られる。
経験年数：若手（1～4年）からベテラン（20年以上）まで幅広く参加しているが、特に10年～19年の中堅層や、教職大学院生などの「学び直し」層が目立つ。
地域：大阪府内だけでなく、愛媛県、京都府、兵庫県、新潟県、富山県など、全国各地（遠方）からの参加が多く、本研究会の注目度の高さがうかがえる。

2. 満足度と評価（Q9、Q15）

授業・協議（Q9）：圧倒的多数が「とても満足」または「やや満足」と回答している。
全体講演（Q15）：こちらも同様に「とても満足」の比率が非常に高い。
役立ち度（Q11）：自校での実践に「とても役立つ」「どちらかという役立つ」という回答が大半を占めている。

3. 記述回答から見る主要テーマ・キーワード

参加者のコメントから、次の4つの大きなトピックが浮かび上がった。

① 「生徒主体」「自由進度学習」への衝撃と関心
多くのアンケートで最も頻出しているトピックである。

生徒の姿：

「生徒が自分たちで授業を進めている」「教員が教え込むのではなく、生徒が学び取っている」「生徒のファシリテーション能力が高い」という点に感銘を受けている。

自由進度学習：

多くの参加者がこのキーワードに触れている。「実際に運用されている場面を見られてよかった」「シ

ステムや評価方法が参考になった」という意見が多い一方、「公立校で同じことをするのは難しいが、エッセンスを取り入れたい」という現実的な悩みとの葛藤も見られる。

② 「探究」「非認知能力」の育成

教科の知識だけでなく、実験やグループワークを通じて「非認知能力（やり抜く力、協調性など）」が育まれている様子への評価が高い。特に理科（サイエンスリーダー制度）や数学、社会科（地歴公民）での実践に対する具体的な言及が多く見られる。

③ 授業技術・デザインへの学び

導入の工夫：

「授業の最初の5分（導入）の大切さ」に関する記述が散見される。

ICT活用：

Padletなどのツール活用や、生徒自身によるICT利用が自然に行われている点への評価。

高大接続・校種間連携：

中高一貫あるいは大学との連携（SSHなど）を生かしたカリキュラムへの関心。

④ 「モデル校」と「自校」のギャップ

「附属天王寺だからできる（生徒のレベルが高いからできる）」という感想を持ちつつも、「どうすれば自分の学校（公立校や教育困難校など）に落とし込めるか」を前向きに考えようとする姿勢が多く見られる。「そのまま真似はできないが、マインドや単元の導入部分は持ち帰れる」という現実的な落とし所を見つけている参加者が多い。

4. 具体的なコメントの抜粋（傾向別）

授業について：

「教師が主導しない授業、まさに自走の授業を参観できた」

「サイエンスリーダー制や、生徒が教え合う姿が印象的」

「自由進度学習のカリキュラムマネジメントや評価について深く知れた」

「映像表現の授業など、新しい切り口があった」

講演・協議について：

「次期学習指導要領に向けた話が聞けてよかった」
「非認知能力と認知能力の両輪を育む視点が参考になった」

「他校の先生方との協議で、悩みや工夫を共有できて元気が出た」

全体的な感想：

- 「刺激的な一日だった」
- 「明日からの授業へのモチベーションが上がった」
- 「生徒の挨拶や対応が素晴らしかった」

5. 総評

本研究会は、単なる教科指導法の伝達にとどまらず、「学習者主体の学び（Agency）」への転換を参加者に強く促す機会となったようである。特に「自由進度学習」や「生徒による授業運営」といった先進的な取り組みに対し、参加者は驚きつつも、その背後にある教師の緻密な準備や覚悟、理論的裏付けを感じ取り、高い満足度につながっている。

参加者は「良いものを見た」で終わらせず、「自分の現場でどうアレンジするか」という課題意識を持って帰路についており、非常に質の高い研修会であったことがデータから読み取れる。



推進日⑥

実施日：12月9日（火） 場所：教科ごと

今年度は小中高連携を踏まえ、「ホンモノ体験実践」を行った。目的として校種間の情報交換、研究テーマを通して連携を深めることをねらいに中学の教科主任が実践を行い、交流を図った。

教科	体験	場所
英語	英語アラカルト	会議室
国語	映画	特別室
社会	お金の力 チョイスデジタル	視聴覚室
理科	望遠鏡を使ってみよう	屋上
保健体育	ニュースポーツ体験	体育館メインアリーナ
音楽 美術 技術・家庭科	縄文土器の形成	美術室

推進日⑦

実施日：2月25日（水） 場所：附属天王寺小学校
内容：授業参観・討議会・交流会

教科部会	参観授業	討議会・交流会
国語	11:00~11:45 授業① 11:55~12:40 授業② 4年国語の授業を公開します。①②は同じ内容です。	16:00~ 4の2教室
社会・総合	3月2日（月）開催 11:00~11:45 授業① 11:55~12:40 授業② 13:45~14:30 授業③ 6年社会の授業を公開します。①~③は同じ内容です。	
算数		16:00~ 5の2教室
理科	09:00~10:40 授業① 11:00~12:40 授業② 13:45~15:25 授業③ 4年理科の授業を公開します。①~③は同じ内容です。	16:00~ 第2理科室
芸術・美術・技術家庭科		16:30~ 図工室
体育		16:00~ オンライン開催
外国語		16:30~ 3の1教室
養護教諭		16:00~ オンライン開催

推進日⑧

実施日：3月19日（木）（予定）

内容：年度総括と次年度に向けて

